



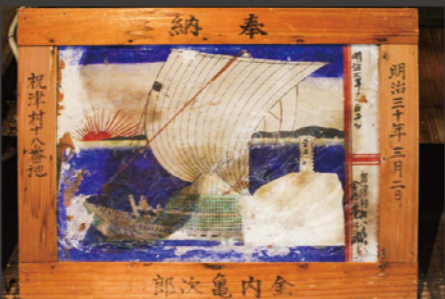
社殿内部。絵馬が16面奉納されていることが記録にあるが、現在確認できるのはそのうち6面。



拝殿正面。「蛭子大神宮」の金文字入り櫓横額は、天保5年に出張漁師が奉納。



船絵馬。明治30年6月19日、「祝津」「金内藤太」が奉納。29×35cm。



船絵馬。明治30年3月2日、「祝津村十八番地」「金内亀治郎」が奉納。32.5×44cm。



御影石の灯籠。文久4年に高島場所請負人・西川家支配人佐々木貞五郎が奉納。



浪に亀の絵彫刻が施された墓股（かえるまた）。



狛犬。「村中」から奉納。世話人には青山など8家の商号が刻まれている。



社殿は祝津海岸の丘陵の上にあり、細い坂道が続く。左下は茨木家中出張番屋。



創建以来、神木とされてきた桑の木。昭和43年、北海道百年記念銘木に指定。

## 恵美須神社

(小樽市祝津3丁目161)

本殿は文久3(1863)年の建築。拝殿、幣殿、覆堂は昭和3年から5年にかけて建築された。木造1階建て。本殿は覆堂に収められている。妻飾りに笈形付き太瓶束を設けるなど、この時期、北海道に建てられた一間社流造り神社本殿に共通する特徴を持つ。境内に小樽市の保存樹木に指定されているクワとイチイがある。平成6年、本殿が小樽市指定歴史的建造物に指定。



えびすじんじゃ  
恵美須神社

## 祝津の海に関わる人たちの信仰拠点

祝津の海岸沿いの道路の山側、茨木家中出張番屋の北側隣の奥にある鳥居をくぐって、急な坂道を登っていくと古風で趣のある神社が見えてくる。この恵美須神社の本殿は文久3(1863)年の建築で、江戸時代から同じ境内地に建つ社殿では小樽最古である。安永3(1774)年とされる創建以来、祝津の人たちの守護神となっている。

祝津はニシン漁で繁栄したまちとして知られるが、地廻船や内地から千石船、すなわち北前船も寄港しており、恵美須神社は漁師たちの大漁の願いとともに、北前船の船乗りたちの海上安全を祈願する神社でもあった。同神社には船主たちが奉納した船絵馬が2面残っており、平成30(2018)年には北前船日本遺産の構成文化財に認定された。

拝殿にはかつて16面の絵馬が奉納されていた。明治中期のものが多く、肉筆、硝子絵、石版画など様々な種類がある。船絵馬の奉納者は、地元祝津の船乗りの金内亀治郎、金内藤太である。当時流行の石版画は7面あり、神馬、明治大帝、恵比寿大黒、風景画など様々で、祝津の茨木マサ子らが奉納した。現在は船絵馬2面と武者絵、馬、風景画など6面が確認されている。

拝殿正面に掲げられている「蛭子大神宮」の金文字入り櫓横額には、

天保5(1834)年5月、「スクタシシ惣兵衛中」「世話人 高橋助五郎」と記載されているが、「浜中」とは道南からやってきた出張漁師のことで、当時の祝津漁場の様子が伺える。

社殿前の御影石の灯籠は、文久4(1864)年に高島場所請負人の近江商人、西川家の支配人だった佐々木貞五郎が、前年の社殿再建を記念して奉納した。狛犬は「村中」で奉納したもので、世話人には青山家など8家の商号が刻まれている。手洗石は、明治37(1904)年、網元連中・近江貞蔵ら7名が日露戦争の戦勝祈願に奉納したものである。

祝津は明治から大正にかけて千石場所として繁栄を極めた。白鳥、青山、茨木はその御三家とされ、祝津の代表的な親方であった。かつては三家が回り番で祭祀行事を盛大に行い、猿芝居、人形芝居、女角力も開催され大人気だった。

昭和30年以降、ニシンがまったく獲れなくなると、衰退した祝津は観光地としての道を歩み始めた。建物が取り壊され、ニシン漁や北前船の記憶が失われつつあるなか、多数の奉納物などをいまも伝える恵美須神社は祝津の歴史を伝えるかけがえのない遺産である。

撮影：相澤詠里(小樽商科大学本気ブコ) 日本遺産による小樽の活性化チーム(文章：高野宏康(小樽商科大学学術研究員))